

# 詩界

第265号

目次

題字 土屋竹雨  
表紙絵 福沢一郎



『月に吠える』100年

詩集像の現在

「身体の言語化」としての『月に吠える』 齋藤 貢 4

萩原朔太郎詩にみる存在論的彷徨 大塚欽一 5

萩原朔太郎と月 左子真由美 12

ベンガル語の詩の世界から見た「殺人事件」 白田雅之 17

『月に吠える』——抒情詩人としての萩原朔太郎 水崎野里子 25

〈孤独〉という病——萩原朔太郎『月に吠える』について 網谷厚子 30

萩原朔太郎詩集『月に吠える』を読む——詩は白に行き着き、また翻る—— 武西良和 34

病氣持ちの自然 —— 「地面の底の病氣の顔」を読んで 関 中子 42

朔太郎詩を土壌とした日本の詩風土の悲劇 後山光行 48

「月に吠える百年」について 今泉協子 51

『月に吠える』序に触れる 遠藤ヒツジ 54

百年目の『月に吠える』と前橋 新井啓子 58

なお聞こえる犬吠

「月に吠える百年」序説 —— 『月に吠える』と私 —— 水橋 斉 62

朔太郎詩と私 塩原経央 63

『月に吠える』と私 野澤俊雄 64

あんたには売らない 小野恵美子 66

青春の病巣をえぐった詩魂 酒井 力 67

『月に吠える』と私の青春 酒木裕次郎 68

「竹とその哀傷」詩篇と 間島康子 70

「見知らぬ犬」と「囚人」 佐藤 裕 71

「国際交流フィンランド2017」

講演記録

カレワラから現代作品まで貫くフィンランド文学・文化の本質　↳二つひとつの歌　末延弘子

73

動画講演詩人の詩

カイ・ニエミネン選詩集『ここに坐し、思い巡らす』　吉田実　訳　81

例会講演

今日を生きる詩　粕谷栄市　88

詩篇「エデンホテル」自作解説　野村喜和夫　94

詩界フォーラム

二〇一七年　詩の評論・研究書・評伝・詩集翻訳書・エッセイ集　富岡悦子　100

会員刊行詩集・会員編集発行詩誌　編集室　105

編集後記　112